

贅沢貧乏VOL.6 【家プロジェクト公演その3】

「ヘイセイ・アパートメント」

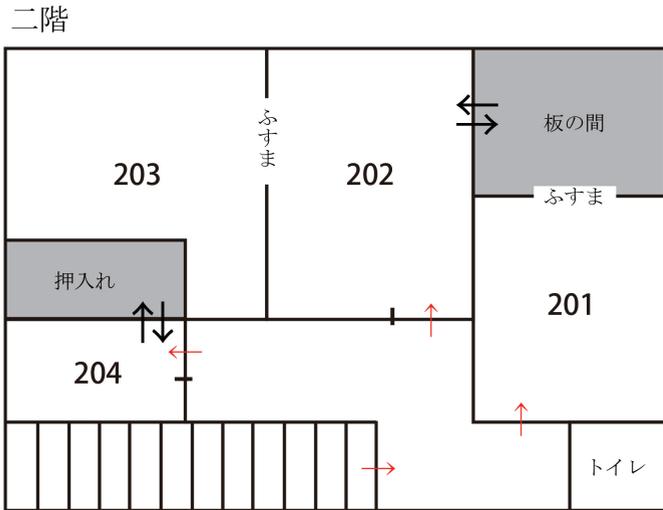
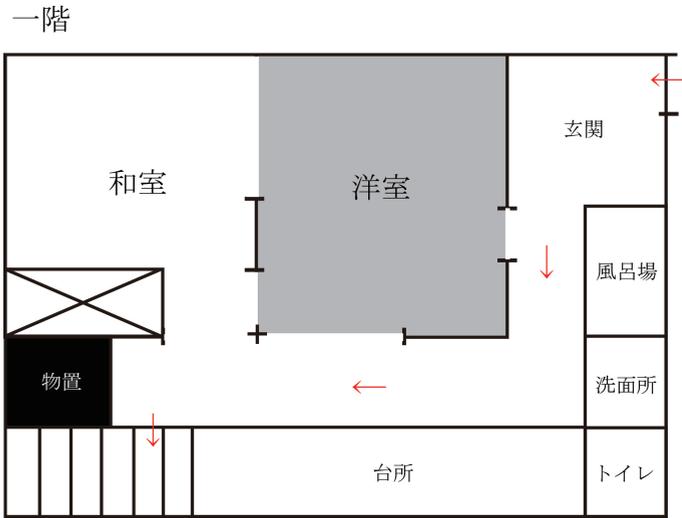
脚本・演出 山田由梨

【本公演について】

- ・この公演は、築50年の木造二階建て一軒家で上演されたものである。
- ・観客は1回につき15名程。
- ・客席はなく、同時多発的に家の中で起きていることを自由に移動しながら観劇する。
- ・観客は、自らドアや窓の開閉を行うことはできないが、開いている場所は自由に行き来することができる。
- ・観客は、自分から住人（役者）に話しかけてはならない。

【上演について】

- ・まず、観客は事前に「市村アパート見学会」についての詳細メールを受け取り、指定された時間に駅へ集合する。そこから案内スタッフに従い一軒家へと向かう。家に到着し、スタッフから家や見学について説明を受けた後、大家の娘が遅れて到着し、この戯曲が始まる。なお、この戯曲ではスタッフのセリフは割愛している。
- ・この戯曲は、大きく序章と本編に分けられる。序章では、観客は5名ずつ3チームに分かれ、大家の娘の指示に従い、全ての住人の部屋を回る。
- ・序章はアラームが鳴ることによって終了し、その瞬間から住人の観客への意識はなくなる。
- ・アラームは全ての部屋にセットされている。アラームが鳴ると、どこにいても住人は自分の部屋までそれを止めないかなくてはならない。止めると、次の日へと日が切り替わる。
- ・時代設定は2050年で、家の中のカレンダーや食べ物・キッチンに置いてある調味料などの賞味期限は全て2050年代の表示になっている。
- ・一軒家の間取りは次の通りである。グレーに塗りつぶされている部分は観客のみが入ることができる場所。黒矢印の箇所は壁や押し入れの中の壁を抜き、観客のみが通り抜けできるようになっている。



【登場人物】

木下美幸（25）

201号室の住人だったが、2か月前、実家の福島に帰るために退去。それと同時に、働いていたコンビニを辞めている。現在無職。

柳田はるか（20）

202号室の住人。木下の働いていたコンビニで働いている。同僚時代に木下に紹介してもらい、市村アパートに入居した。鳥取県出身。

安藤佳美（26）

203号室の住人。木下・柳田が働いているコンビニと別の店舗で社員として働いている。市村アパートには一番長く住んでいる。福島県出身。

土田和歌子（29）

204号室の住人。アパートの近くのファミレスで夜勤帯でアルバイトをしている。「スカハイ」というバンドの熱狂的なファンで、ボーカルのTKを尊敬している。

市村優季（20）

市村アパートの大家の娘。大学2年生。

## 【一階】

優季が玄関から入ってくる。

優季「あ、すいません遅くなって。(スタッフに)ごめんね、メールみた?(客に)あ、すいません。電車乗り遅れて。こんにちは。優季です。あ、市村優季です。ここの、大家の娘です。

えっと、ここ、ただの一軒家なんですけど、二階に4部屋あって、それをそれぞれ貸していて、今は一人出て行っちゃってるから、3人しか住んでないけど。なんか、うちのお母さんが、アパートって豪語するから、まあアパートっていうことになってます。なので、共同アパート、というか、このへんは全部共有スペースで、(1階和室を指して)「ここも、あ、すいません汚いですけど、ここでごはんたべたりする人もいたりとか、部屋が狭い人はここで寝転んだりとかします。

で、こっちは、お風呂とトイレとあって、お風呂はちよつと古いというかレトロな感じですけど、浴槽が深いし、追い炊きもできるから、まあいいと思います。トイレは二階にもあるんだけどこないだ流れなくなっちゃって使えなくて。

あとはーここがキッチンで電子レンジと炊飯器があって、自由に使えます。冷蔵庫も、これ一個しかないの、部屋にそれぞれあるわけじゃないので、みんなでこれを使います。だから、中に入れる時はちゃんと名前書かないといけなくて、名前書かないと勝手に食べられちゃったりするので、注意です。

あと、は、これ(キッチンの壁に当番表がかかっている)当番表とかもあって、公共の場所はみんなで順番に掃除しようということ、こうやって一応決めてるんですけど、(二階から安藤が降りて来て階段から見ている)あ、あんまり守ってる人いないですよ?」

安藤「(小声で)なにこれ」

優季「え、あ、これ今日、見学会」

安藤「見学会?」

優季「あとで部屋も見に行くんだよ」

安藤「え?全部?」

優季「うん、言っただけだったっけ?」

安藤「知らないよ」(と言いながら一階の和室の窓の外にかかっている洗濯物を取り込む)

優季「あ、でもこれ安藤さんは守ってるか。これ、安藤さんが作ったから。ふふ。あ、あの人、安藤さんです。」

二階から柳田が降りてくる。

## 【階段】

柳田「なんすかこれ」

安藤「見学会だって」

柳田「え?」

安藤「あとで全部部屋見るらしいよ。ほら、掃除とか」

柳田「ああ、わたし部屋きれいなんで大丈夫っすよ」

安藤、二階へあがっていく

柳田「ここボロいっすけど大丈夫ですか?」

↑柳田、二階へあがっていく。

柳田、二階へあがっていく。

## 【二階・廊下】

土田「なに?」

柳田「見学会だって」

土田「え、やだ」

ふたり、部屋に入っていく。

優季「ボロい…ボロくないですけど、まあ築7、80年経ってるのでこのへんの床とかはガタガタですけど。えっと、じゃあこれから、お名前をお呼びしますので、呼ばれた方から順番にご案内します。」

◆チーム1◆

1 安藤「あ、どうぞ、散らかってますけど、座布団とかもないですけど、すいません。

あ、これ一個だけあるわ。誰か使いますか？……はい。

結構、遠くから来たんですか。（誰かが答える）

あ、そうなんです。（沈黙）

なんか、お茶とか出せればいいんだけど、ないわ。特に。これ。お茶とかなんか……あ、お茶もね、これしかないや（ペットボトルのお茶を指す）

（話題を探して）あの、最近、水分取ってますか？（自分だけお茶を飲む）最近あったかくなってきましたけど、案外、結構水飲むの忘れて、良くないんですよね……あ、（笑い出す）ごめんなさい自分だけ飲んで、わたし。ごめんなさい。本当に。なんか、出せたらいいんですけど……そのティッシュとつてもらってもいいですか、あ、すいませんありがとうございます。（それで鼻をかむ。ゴミを枕元におく。）あ、わたしは安藤つていいいます。

この部屋は、どうですかね。ここだけの話、この部屋が一番広いんですよ。ラッキーでしたね、ここ、収納も多いし、広くて、安いわりに広くて、でもここ本当に家賃安くて、助かってますねー。大家さんが市村さんつていって、綺麗な方ですよ。その娘さんの優季ちゃん、あ、さつき案内してくれた子ですけど、優季ちゃんはよくこの家に来て、何かしてます。ぐうたらぐうたら。市村さんは別の、たしか、中野区のほうにすんでいて、ここを、こうやって貸していると。いいですよねー。わたしも不動産ほしいですよ。あ、よかつたらどうぞ。（部屋にあった煎餅をティッシュを広げて出す）この中に不動産持つてる方つていらっ

◆チーム2◆

1 土田「あ、どうぞ・（はいってみる）せめえな。まあ、仕方ないですよ。ね……座ります？どうぞ。（人数を数え始める。1・2・3・4）……狭いですけど、掃除はしてます。古いですが、ここ、掃除はしてます。汚くないので、安心して座ってもらっていいと思います。（ここからお茶を入れないながら）

……どうですかね、この部屋は。まあ、この部屋が一番狭いですし、日当りのにも、日が入る時間は短いですし、冬はクソ寒いですし、夏もクソ暑いと。でもいいところは窓がふたつもあるところなんです、壁が、（急須にさわって）あつ……なので、壁が、壁がぼぼ窓、という……ふふ（少し黙ってお茶をいれてる）

人間にはこういうところに無理なく住める人と、住めない人がいるんじゃないかと、わたしは思います……あ！あはは。あの、よく人間を安易に2種類に分けるやつあるじゃないですか。今、あれっぽかったですよ。すいません。あ、どうぞ、（お茶を出す）……あ、でも、どっち派ですか？あ、この部屋で暮らせる派ですか？（観客にきく）4対2ですか。そうですか……まあわたしは、ですけど、そんなに苦はないですよ。狭いとこそ好きだし。この部屋が一番お家賃は安いです。あと、下の共有スペースみましたよね？あそこ結構広いんで、そこもあるし、まあ、風呂、ト

◆チーム3◆

1 優季「すいませんお待たせして。えーっと。この部屋から見ていくんですけど、（二階突き当たりで）まず、ここは、トイレです。鍵はこうやってあけるの。すごい古い映画の中みたいでしょ。でも、今流れなくて使えないんですけど。この水道はもう化石。苔みたいなの生えて。でも水はでまーす。（蛇口をひねって水を出す）みんな二階に部屋あるから、この水道は結構使うんですよ。歯ブラシと、タオルとか置いて。じゃあ、まずこちらの部屋から御覧くださいー4畳半ですなーまああと、押し入れがあつてー。

（本棚の上に不自然に置いてある桃缶が目に入る）これ。桃缶。え？誰の？ん？……あ、すいません。（一旦桃缶を手を持っておく）え、なんだっただけ。えっと、さつきも話したんですけど、ここは大体建ってから7、80年経っているんで、ホントちよつとガタきてるところはあつて。例えば、この襖とか本当に開きづらくてやばいです。でーこっちはベランダです。布団とか干せるのここで。ごめんなさいサンダルが人数分ないから、み

しいやいます？あ、言いづらいですよね。そうですよ。でもねえ、いいですねえ。不動産。わたしもそういうのがあれば、本当に少し楽だったんじゃないかなって思いますけどねえ。不動産は、どっちかというところ、先祖さんが、どれだけその、がんばってくれたか、じゃないですけど、そういうところもあるんで：仮にわたしが不動産を、土地を、都内に持っていたら、やっぱり、ちよつと本当に借金してでもアパートとかにしますね。マンションでもいいし。高くしますね。あ、上にね、上に上に高くなりますねえ……建てちゃう。そしたら、そう、ほら、家賃収入も入るし、今ほど働かなくてもいいかもしれないし。まあもちろん足りないならちゃん働きますけど、本当に何でもいいし、今みたいにコンビニでも別にいいし。少しシフトは減らしてもいいかな。週2とかでいいかな。夜勤もしないですね。ここ夜勤してる方多くて、大体が夜勤だから、生活リズムが変にあってるんですよ。みんな。大体わたしも、夜とか遅い時間に出て午前中とか明け方に帰って来ます。隣の柳田さんも、わたしと違う店舗の同じコンビニでアルバイトしてるんですよ。わたしは社員ですけど。こっこの部屋の土田さんなんかは、ファミレスでアルバイトされてるみたいですね。あ、土田さんの部屋、見たら驚きますよ。わたし、ちよつと中が見えることあるんですけど、すごいんですよ。バンドかなんかのファンやられてて。それで。ちよつと、見てみますか。ここ、ほら」

【観客、土田の部屋へ移動する。】

2土田「あ、どうぞ。あ、どうぞ。あ、あの、安藤さん、なんか、言ってみました？わたしのこと。あ、わたし土田ですけど、あ、安藤さんって、こっこの、ね、なんか言ってみましたか？悪

イレも別ですし。だから、使いようによつては、お得かもしれないです。二階にもトイレあるんですよ。あ、今故障中ですけど。うん：わたしが説明できるのはこんなもんなんですけど

(スカハイのポスターを見る)

あの皆さん、スカハイって知ってます？知ってます？知らないです？あ、そうですか。……最高つすよ。はい。本当に、なんか、なんでなんですかね、世の中、スカハイみたいなバンドが全然評価されないってどうか評価はされてるんですけど、広がらない？知らない人が多いこととかにもう憤りだし、紅白だって、もうアイドルとニッポン応援ソングと、演歌と、そんなんじゃないじゃないですか。つまらないですよ。音楽分かってんのかって話ですよ。もう音楽番組と言つていいのかって話ですよ。あ、違うか。音楽番組じゃないか。もはや。はは。

あの、スカハイは、まず本当に音楽を愛しているっていうことがひとつ。それから努力を怠らないことです。ひとりひとりの技術も高くて彼らは、常に更なる良い作品を作ろうと努力を怠らない。そして歌詞がですね、歌詞がすごくね：歌詞が：もうなんか歌詞っていつていいのかな。あれは、歌詞とかじゃないんですよ。なに？なんだろう。ポエム？あ、なんか余計だめだ。なに？なんだろう。何て言えばいいんですかね。賛美歌？ちがう。全然ちがう。なんだろう。ああ、わたしばかりだから全然いい表現が生まれてこない。語彙が足りない……とにかくスカハイの歌詞が本当によくて、わたしが、とかじゃなくて、人類にとつてプラスなんですよね。スカハイのTKは、人類を愛して、平和とか自由とか、本当に心から信じてるし、まっすぐだし、それなんだけど、わたしのところに届

んなで外に出られないですけど。はい。つとーこんなもんですけど。こはなんもないからつまらないですね。まあとりあえず座りましょうか。ここ2週間前まで木下さんっていう人が住んでたんですよ。わたしの6個か7個上の女の人だったんですけど。2週間前に実家のたしか福島に、帰っちゃって。優季、あ、わたしはすごい、木下さんと結構仲良くって、一番話しやすかったし、好きだったんだけど。

(桃缶を見てる) え？これ：賞味期限が：2017年って書いてありますよね？え？これ優季生まれる前なんですけど、え？これ大丈夫なのかな？中身固まったりするのかな？これ。……あ、まあいっか。えつと、なんだっけ。

あ、この家は、うちのお母さんが昔妹と、あ、わたしの伯母さんにあたる人と二人で住んでいた家らしくて、姉妹で。で、この部屋昔はうちの伯母さんの部屋だったらしいんですよ。すごい昔の話ですけど。もうこの家も壊しちゃえばいいのと思うんですけど、壊さないんですよ。まあ、今こうやって住んでる人たちもいるからいいんだけど。優季は楽しい。今はだから3人ここに住んでる人がいます。これからお部屋それぞれ見てもらうんですけど。向こうの一番狭い部屋が土田さんっていう人の部屋で、その隣の大きい部屋が安藤さんっていう人で、ここの隣の部屋が柳田さんっていう人の部屋です。柳田さんはね、わたしと同年でみんなギダちゃんって呼んで。ギダちゃんは一、まあいい子なんですけど、ちよつと変で。昨日ね、ギダちゃんが、急に人間ってなんのために生きてると思う？とか聞いてきて。20歳にもなって、そんなこと人に聞きます？普通。だから、わたしそれはやばいよって言つて。でもすこ

口とか、悪口とか、大丈夫かな。大丈夫かな。昨日：ちよつと、トイレ行ったんですね、一階のトイレ。わたし、トイレ行って、その時にトイレトパーがなくなつたんだよね。なくなつたんです。そう。それで、わたし、あ、ないなーと思つたんだけど、ちよつとめんどうくさくて、その、芯のままにしちやつたんだよね、魔が差したんです魔が差して、その直後に安藤さんが入られて。わたし、アーツって思つて、そういうの、ちよつと安藤さんうるさいじゃないですか、だからアーツどうしよう、後の人のこと考えてとか結構言うので、だからアーツって、そう、でも安藤さん、何も言わず上にあがつていったんですよね、でも、その時聞き間違いかな？階段でチツって聞こえたんですよね。チツっていうの、あれは、舌打ち？なのかな？それとも床きしみ？きしみ？どっち？どっちどっち？つてなつちやいましたからー。んーでも悪口は、言つてなかつたんですよね。じゃあ、床のほうなのかな。ふふ。

けてくれるんだよね。びしゃーって届けてくれるんだよね。やつぱり人間にとつて最後に物を言うのは愛なんすよ。まじで。それを、教えてくれたのは、スカハイだったですねー。うん：暑い？大丈夫ですか？わたし暑いわ。(窓を全開にする)お茶、のんでくださいね。わたしなんかのかわいて(お茶を一气飲みする)ふー。(窓の外を見る)平和だー。ちよつと、そこ、ドア開けます。」

い絶望的な顔してるから、まあ、そういうのつて誰でも通る道だから大丈夫だと思つて言つたらちよつと落ち着いてましたけど。まあそういう子です。ギダちゃん。会えば分かると思つますけど。こつちです。どうぞどうぞ。」

歌詞が、歌詞がいいーんですよねー。ふふ。今度、ライブあるんですよ。しかもワンマンなんですよね。すごいですよーワンマンーついにこまで来たかスカハイ！ふふ。そうそう。今、柳田さん誘つてて、どうかなー

【開けたところに優季がいる。木下の部屋に移動する】  
2 優季「あ、どうぞどうぞ。つちさんの部屋すごい狭いでしょ。あの部屋にはいる人つて代々ちよつと変な人が多いかもしれない。やつぱりああいう狭い部屋つて住める人と住めない人つていると思うから。でもつちさんはあの部屋、似合つてるなって思う。なんとなく。分かります？？その感じ。でもつちさんもう2年くらいあそこ住んでて。ファミレスでバイトしてるんですよ。ここから20分くらい歩いたところにある、ファミレス。」

【柳田の部屋に移動】  
2 柳田「こんにちはー。どうもー。どうですかこは。わたしはまだここ住み始めて1年とかなんですけどね。まあこのへんは、いいですね。平和だし。アリオ(※)もあるし。アリオ分かります？あっちのスーパリー的なやつですけど、大体のもん全部入ってますからね。100均とかミスドとか、服屋とか寿司屋とかヨーグルト屋とか、小物屋とか、ペット屋とかおもちゃ屋とか、くすり屋とかご飯屋とか寿司屋とか。あんなね、都会なんですよ。相当テンションあがりますよね。だから結構暇な時は、アリオで時間つぶしますね。あ、私、柳田つていいいます。まあ、あとは、あ、ここのいいところは、まあ、家賃が安い。浴槽が深い。大家がゆるい。住んでる人がまあまあいい人。家賃が安い。家賃が安いんですよ。こことか、唯一角部屋じゃないんで、結構安いですよねー。まあ狭いですけど。言つたらここ二部屋ありますからね。居間と(出窓を指して)寝室ですよ。(出窓の台の上布団を敷いてベッドにしている)わたしまずベッド派じゃないですか、でもここベッド置けないんで、ここをベッドにすること思いついたんですよね。思いついた時すごい目から鱗つてこのことか！つていうか、あのじゃんベッド！みたいな。(満足気に笑つて少しの間黙る)こつちの安藤さんの部屋とか、ここより広いし、家賃も高いですけどね。

柳田さん、今シフト確認してもらってるんですけど、行ってくれるかなーどうかなー？

あ、柳田さんっていう人が住んで、向こうの部屋に、柳田さん。コンビニでアルバイトしてる子で、若い子で、親しくしてくれる子です。うん。柳田さんですねー。

(しばらく間)

あの、ブラジャー、って、あるじゃないですか。女性のこと。あれのこと、ふふ、ね、あれのこと、乳カバーって呼ぶんですよ。柳田さん。ふふふ。変でしょ。わたし「それはやめろ」って言うんだけど「それはいけない」って言うんだけど、やめないですよ。ね。育ちかな？鳥取ではそう呼ぶのかな？聞いてみようかな、今度。わたし今思ったんですけど、ここやっぱり5人入っていい部屋じゃないですかねー、んー。ちよつとそのドア開けてもらえますか？」

【開けたところに優季がいる。

木下の部屋に移動する】

3 優季「あ、どうぞ。こっちの部屋も見てみてください。(窓が開いている。優季は桃缶をボールペンで刺しながら、外を見ている。)晴れましたね。朝、ちよつと雨が降ってましたけど。(その日の天気のこと)

あ、これ、この部屋にあったんだよね。木下さんが置いていったのかな？桃缶。見て、これ2017年のなんですよ。すごくないですか？わたし生まれる前なんですけど。これ大丈夫なのかな。中身。食べれますかね。缶詰だから、大丈夫なのかな。開けてみたいんですけど。これ。缶切りなくて。今、缶切りもってる人いますか？

あ、いいですよ。ねー。だから、これで、なんとか……

あ、木下さんって、その2週間前までここに住んでた人なんですけど、1

けど。同じ種類のコンビニで働いてるの。だから、大体みんな夜勤だから、夕方とか夜にでて、朝帰ってくる、みたいな。たまたまみんなの生活リズムがあつて。昼夜逆転してるけど生活リズムがあつて。変なの。って思う。ね。

もうひとりいたんですけどね。木下さんって人。木下さんも隣の柳田さんと同じコンビニで働いてたの。確か、木下さんが紹介してギダちゃんはこのに入ったのかな。こっちが、ギダちゃんの部屋。ギダちゃんってなんかちよつと変わつて、たまに言ってることわからなかったりするけど、同い年で、まあ良い子だから。あ、こっちです。どうぞ。」

【柳田の部屋へ移動】

3 柳田「(部屋でぼーっとしてる)んーこは、あんまり広くはないですけどね。本当わたし、ベッドじゃないや嫌な人間なんですけど、ここのベッド置ける広さじゃないじゃないですか。(出窓のカーテンを開けると、台の上に布団などがしいてある)見つけましたよ。ねー。(寝て見せる)はまる感じがいいですよ。ねー。せまくても工夫することができますね。

知ってます？工夫したり、んー想像したり、するのは、人間しかできないらしくて、それが、動物と人間の違いらしいんですよ。優季ちゃんが教えてくれたんですけどね。優季ちゃん、頭が決していいわけじゃないんですけど、でも、おっ！って思うことを知ってて、いいんですよ。優季ちゃんは、この家の大家の娘さんで、ここによく遊びにきてるんですよ。大学も行ってんだから、そっちの友達とかと遊ばばいいのって思うんですけど、ここにばつて来れるんですよ。つまらないのかな。大学ってわたし行った時ないからわかんない

どっちが魅力的かっていう話ですよ。ちよつと見てみます？比べてくださいよ。遠慮しないで入っていいと思いますよ。こっち」

(※アリオ：駅から家への道中にある大型商業施設。)

【安藤の部屋へ移動する】

3 安藤「……ちよつと変でしょ、柳田さん。まあ、変なんです。わたし隣に住んでるからわかるんですけど。ここのだけの話、あの、明け方とか、午前中とかにね、あ、座ってくださいね。ぶつぶつ独り言なんか聞かえてくる時があつて、あ、ここに住んでる方たちって大体わたしも含めて夜勤してるので、午前とか明るい時間は寝ることが多いんですけど、まあ、そう、独り言が聞かえてくるんですよ。で、わたし寝ようとしてるんですけど、聞こえてきちゃうから、うるさいなと思ってるんですけど、で、よく聞くと昨日なんかは、「悔い・ミスは活かし、視界は澄み行く」って言うてるんですよ。ね、いや意味がわからないんですよ。全然ほんとに。でもそれをずっと言ってる、もうこれは寝られないから注意しようと思った時に、わたし気付いたんですよ。「くいみすはいかしはいはすみいく」(二回書く)って、ね、回文なんです。たぶん、意味は、後悔・失敗は活かしていくって、そうすると視界は澄みいってクリアになっていく、みたいな。まあ、分かりますけど、すごいんですけどね。いや感心してる場合じゃないんですよ、本当にそういうところとか迷惑で、あとは当番とかね、忘れることが多いので。

ここ、共同アパートですから、お風呂とかねトイレとかは曜日を決めて掃除したりとかしてるんですけど、そういうのも本当に重要だ

年くらい住んでただけで出てちやったんですよ。実家の福島に戻るとのこと。わたし割と仲良かったから、残念で。結構話合う感じだったから。年は6個か7個くらい違うんですよ、でも全然、大学の友達とかより全然話あうし、話きいてくれるし、好きだったんだけど。……木下さんって、くだらないこと言わないですよ。あと、なんていえばいいのかわからないけど、悲しんでるみたいな空気があって、それいいな〜って思ってた。

…連絡先も聞いてなかったな。わたしがここに遊びにきた時だけ、会ってたから。でも、それくらいがいいじゃないですか。無駄に連絡とって、違うし。ここで会えるのがいいんですよ。わたし、高校生の時から、よくここ来てて、いろんな人が住んでいったんですよ。最初は、うちのお母さんの友達の娘とかが最初の一人暮らしするのにここ借りる、とかしてたんですけど、家賃安いから。それからどんどん紹介して、紹介して、全然関係ない人も住むようになってて、だんだんこういうアパートっていう形になったんだけど。色んなところから来てる人がいるから面白くて、その部屋の柳田さんとかは初めてわたしと同年の人が入ったんですよ。ちよう面白いよギダちゃん。ギダちゃんは、鳥取出身なんだけど、田舎が本当に嫌いらしくて、ほぼそれだけの理由で上京してきた。

あと、彼氏が今軍に入ってた戦争行って、帰って来たら一緒に東京住みたいから待ってるっていうんだけど、よく聞いてみると、その彼氏っていう人も、よく話聞いてみると3、4回しか会った事ないみたいで、なんか話きけばきくほど面白いんだけど、あ、こっちギダちゃんの部屋。たぶ

んいるから。こっち。どっぞ。」

【柳田の部屋へ移動】

いですけど。でもわたし、東京におなじ年の友達いなくて、優季ちゃんいるのは嬉しいですけどね。あ、優季ちゃんどわたし、ヘイセイの最後の年に生まれてるんですよ。それ言ったら、木下さんっていうひとに「ふたりって世紀末っぽいよね」って言われてそれすごい覚えてます。あれは〜いつだったかな〜夏頃だったかな。仕事の帰り道に言われたんですよ。なんでですか世紀末っぽいってw世紀末ってなんすかwあ、木下さんって2週間前までそっちの部屋に住んでた人なんだけども。木下さんがいなくなっちゃってからは、大体優季ちゃん、そっちの部屋でぼーっとしたり、してますね。

こっちは、安藤さんって人が住んでて、わたしとちがう店舗のコンビニで社員やってる人です。ものすごい働いてますね。噂ではもうすぐ店長になるかもらしいですよ。でもどうなんですかね。店長。うちの店の店長なんかクソ泥のようになりながら働いてますからね。夜勤と激務とクレームで人相やばいですから。安藤さんにはそうなっ

てほしくないですよ。あ、こっちが、安藤さんの部屋です。」

【安藤の部屋に移動】

4安藤「ちよつと迷惑なんですよ。え。お隣の柳田さん、いつも当然のよう

し、言って共同生活ですから。こは。協調性とかね、尊重するとかね、そういうのが自然にできる人じゃないと困りますよね。わたしがここに住み始めた時は、すごく良識のある人たちばかりで、そういうストレスは全然なかったですからね。こっちの隣の土田さんなんか、別に良い方ですけど、すごいな

んだか、バンドのファンやってらして、ライブにすごく誘ってくる時なんかあるんですよ。あれはやめてほしいですけど。すごいですよ、部屋にポスターとかびっしり貼ってあって。ちよつと見てみます?」

【土田の部屋に移動】

4土田「ヘッドフォンで音楽をきいている、と、観客が部屋にいることに気がつく」あ、はい?あ、あ、あ、ちよつと待って。あ、今、あ、はい?あ、すいません。なんだなんだ。うんうん。あ、狭いですよね、ここ。座れますかね。ごめんなさい。こちよつと狭くて窮屈ですよ。あ、うん、うん、座ろう。うん。落ち着こう。あ、わたし土田というものです。あ、うんうん。ちよつと来週、ライブがあるんですよ。その予習っていうか、イメトレっていうか。はい、してて。だからちよつとびっくりしちやいました。

スカハイっていうバンドなんですけど。わたしがとてもリスペクトしてるバンドなんですけど。知ってる方いますか?(いない)あそっかそっか。あれ?正式名称はスカイハイっていうんですけど。知らないですか?あ、そっかそっか。これからですね。がんばろうスカハイ。メンバーは4人で、みんなとても個性豊かです。ドラムのユジューンは、すごくムードメーカ的な存在で、でも、TKって、あ、ボーカルのTKが作詞作曲して

4 柳田「(しばらくぼーっとしている) あの、最近人間の幸せについて考えるじゃないですか。考えますよね。人間ってなんで生まれて来てるんだとか、なんのために生きてるんだとか考えるじゃないですか、だれでも通る道でしょ? そう聞いてますけど、誰でも通る道だって。わたしまさにここ2週間、その誰でも通る道を直進中ですね。ちよっとそのこと考え始めて死にたくなっただけど、誰でも通る道だよって優季ちゃんが教えてくれて、希望が持てました。この中にその道通り終わった方がいいですか? わたしは、まだ道のゴールの方は見えてませんねー。まず、この2週間というのはですね、2週間前、隣の部屋に住んでた木下さんが、ご実家に戻られて。あ、わたし木下さんと同じコンビニでバイトしてたんですけどね、あ、だから、木下さんに紹介してもらって、ここ住み始めてるんですけど。あ、で、木下さんいなくなるじゃないですか、だから、その分の夜勤のシフトが空いちゃったんですよ。だから、それからわたし日勤だったんですけど、それから夜勤に入るようになったんですよ。他は大学生とかパートの方だから、夜勤がつつり入れる人はいないんですよ。まあ言って暇だからですよ。わたしが一番暇だからです。

まあ、どうなんですかね。夜勤入り始めて、わたし、その勤務中に、人間の幸福についてもっぱら考えますね。人は、夜中に働いていいのかっていう話ですよ……うーん。コンビニは365日24時間ですからね。誰かが必ずやらなくといけないんですけど。なんかね、上手く言えないんですけど、夜勤してるとき、頭、なんか、どのへんって言ったらいいかかな。このへんかな。具体的な場所があるんですよ、このへんの頭の中の筋肉が、衰えていく? 溶けてる? 感覚あるんですよね。」

▼全ての部屋のアラームが同時に鳴る▲

かもたまに歌ってるでしょ。何思ってたかしらんけど、歌ってるでしょっていうと歌ってないですっていうんですよ。いや、歌ってるでしょっていつても歌ってないって。あれさ、ヘッドフォンでなんかバンドの音楽をさ、大きい音で聞いて、自分が歌ってるの気付いてないんですよ。自分の声の大きさに気付いてないんですよ。あれ、ちよっと。ねえ。考えものですよ。こっちは、なんか知らないけど、歌詞まで覚えちゃいましたからね。「♪急に豪雨ー、急にstop the rain」これですよ。昔は、2年前なんかいた人たちは、節度もって、みなさん肅々と静かにそれぞれ部屋で暮らしてたんですけどね。今木下さんのところなんか空いてるけど、次はどんな人が入るんだかわからないですけどね……ここはアパートですけど、ある意味では共同生活なんですから、暗黙の了解みたいなのが感覚で分かる人じゃないとダメなんですよ。わかります? わたしの気持ち。節度とか、そういう……わたしは、何もきつちりきつちりしろって言うてるんじゃないかって、そういう暗黙の了解みたいなことを言ってるんですよ。あ、すいせんね。

…木下さんは、しばらくここ住んでたんですけど、ご実家に帰られたそうですね。福島の。わたしも福島だから……そう、まあでも帰ったんですよ。できたらわたしも帰ったほうがいいなと思ってたから、木下さん。良かったよねえって思うけど。わたしも帰りたいんですけどね、去年の年末は、帰れなかったから。」

▼3人の住人はアラームを止める▲

るんですけど、本当に太陽みたいな人です。ふふ。今度あるライブは、下北沢で、ワンマンライブです。初のワンマンきたーです。ふふ。今聞いてた曲は、「空にチェンソー」です。せつかくなくて、どうですかね。みんなで聞きたいとおもいます。(CDコンボで音楽をかける) 【歌詞「相槌の間さえもないよ 早すぎてついていけないなんて言おうか迷ってるんだ 気がつけば次の話題 明日は何かになれるかな スピードの違う世界で急に豪雨 急にstop the rain 僕にも晴れを見せてくれよ】

(音楽を止める) これは、あの、時代の移り変わりというか、歌詞が「相槌の間、さえもないよ早すぎてついていけない」ね、で、「なんて言おうかまよってるんだ、気がつけば次の話題」ってゆって、それで、「あしたはなにかになれるかな」って言うんですよ。あしたは何かになれるかな! って言うんです。それで「スピードのちがう世界で」と、くるんですけど、ここ、ですね。わたしすごく、あー分かるな、って、「スピードのちがう世界で何かになれるかな」っていう。わたしも、いま自分の生きている、この時間ですね、と、やっぱり外、外、とすこしちがうなっていうか、ついていけないなって思うことがあって、思いませんか? 不安にもなるけど、あのTKもそう思ってるんだーっておもうと、あーそっかーって。スカハイはこういう歌も歌うけど、すこしメッセージ性の強い、というか、社会に向けて声をあげるような曲もつくって、私はその姿勢にもとても共感するというか、感銘? というか受けます。受けますし、すごいなって、おもいます。誇らしい、というか。」

柳田がひどくおびえた形相で、ネズミの箱を持って、階段をあがってくる。自室にはいり、椅子の上にカゴをおく。

柳田、安藤の部屋に勢いよく入る。

柳田「安藤さん、ちょっと話きいてもらってもいいですか？」

安藤「なに」

柳田「本当にちょっといいですか」

安藤「なに」

柳田「本当に、ちょっと、わたしふざけてるんじゃないんですよ」

柳田、土田の部屋へ

柳田「土さん、ちょっといいですか」

土田「どうしたの？」

柳田「土さん、ほんと、ちょっといいですか？」

土田「どうしたのどうしたの？」

柳田「いや、ほんと、わたし本気でちょっとやばいんで」

土田「なにになに」

柳田「(木下の部屋に) 優季ちゃんいる？」

優季「(二階、キッチンから) なに？」

柳田「(二階に向かって) わたしの部屋ちょっと来てくれる？」

優季「なんで？」

柳田「いいから早く」

優季「なにー？」

柳田「ちよつと、ここに座ってください。」

土田「どうしたのよ」

優季「(上がってきて) なになに？」

柳田「ちよつと、今わたし本当に、今わたし本当に、やばくて、今から話すことちよつとちよつと大変で信じられないと思いますし、信じてない、いや、信じざるを得ないですけど、今、ちよつと実際混乱してますね、わたし」

土田、優季、口々に「なに？どうしたの？」

柳田「ほんと今混乱してて、正直いつて取り乱していて、でもそれを表に出さないようにしてますね、なぜなら人間だから。」

土田、優季、口々に「どうしたの？なに？人間だから？」

柳田「それこそがやっぱり人間らしい行為ですよね。」

土田、優季、口々に「なに、どうしたの？なんだなんだ？人間？」

柳田「わたしは人間として、人間的な行為として、今、平静を保っていることを誇りに思ってます。」

優季、軽く柳田を叩く

優季「いいから話してよ」

柳田「優季ちゃん！すぐに暴力に物を言わせるのは低俗だよ！」

優季「は？なに？低俗って」

柳田「人間として底辺に近いってことだよ」

優季「なに？優季がそうだっていいわけ？」

土田「ちよつと、カップラーメン食べていい？お湯が…」

柳田「そうなるから気をつけてっていつてるの」

安藤「なんなのよ、まったく」

柳田「ちよつと動かないでくださいよ！」

土田「え？」

柳田「今から重要な話するっていつてるじゃないですか！」

安藤「だったら早く話してよ」

優季「ほんとだよ」

柳田「今からあんたら生き証人になるわまじで！」

優季「もうなにー？」

柳田「聞いて下さい。ちよつと、座って。ここ。わたし今朝すごいもの見ちゃったんですよ。で、今も見ています。今もその渦中にいます。わたし、今日早朝からシフトだったから、まだ薄暗い中、店いったんすよ。ね？したら、うちの店の店長が、裏口の階段のところ座ってタバコ吸ってたんですよ。いつものことですよ。泥のように疲れて、店長はいつもそこでタバコ吸うんです」

優季「いいじゃん」

柳田「ね？それで、わたし、あー店長タバコ吸ってるなーと思って、で、よく見ると、店長がぶるぶる震えてるんですよ。ぶるぶるぶるぶる。そんな寒いか？寒くないよなあ？まあ、朝は寒いか？多少、冷えるなあ？で、でも、まあ挨拶しようとおもって、「おはようございますー」って言ったんですよ。わたし。そしたら聞こえてないみたいで。それで、わたし、店長の肩に手をかけたんですよ。トントンって、そしたらつぎの瞬間、店長がビクって、なって、こつちをバツて振り返って、おびえた店長の顔が見えたかと思ったら、みるみるうちに。あの、みるみる……」

優季「みるみるなに？」

柳田「みるみる、あの」

安藤「みるみるなに？」

柳田「みるみる」

土田「どうしたの？」

柳田「みるみる」

優季「みるみるなに？」

柳田「あの、あの、みるみる……みるみるネズミになったんですよ。店長が。」

安藤「え、なに？」

柳田「ネズミになったんですよ」

土田「え、なにが？」

柳田「店長が、ネズミになったんですよ」

問

優季「ちよつとギダちゃんやばくない？」

土田「うん、どうしたの？」

柳田「あの、それで、ここにいるのが、店長です。」

柳田がカゴのふたを開ける。一同、覗き込む。

中が見えると、一同悲鳴をあげてそれぞれの部屋へ逃げ込む。

優季「ぎゃああああああ！」

土田「なにやってんの、柳田さん！」

安藤「なに？なに？なに？こんなにこんな、ネズミ、連れて来てるわけ？」

優季「ネズミネズミネズミネズミネズミ！」

安藤「家の中にネズミ持ち込まないでくださいよ！柳田さんだけの家じゃないんですよここは！」

優季「優季ネズミ大っ嫌いなんだけど！さいあく！」

土田「不潔だよ！不潔だよ！」

優季「本物！本物！きもい！」

柳田「みなさん、わたしの話聞いてました？」

安藤「みんなのアパートなんですよ！人の迷惑を考えてください！」

柳田「だから、これはネズミじゃないんですよ！」

土田「どうみたってネズミだろ！」

柳田「ネズミじゃないんですよ！」

優季「誰かそと出してよー！むり！むり！」

土田「ネズミだこれはー！」

柳田「これは、ネズミじゃないんだって！！店長なんだって！」

一同「……」

優季「え、なに？」土田「え、なにになに？」

安藤「え、なに？え、なに？柳田さん」

柳田「だから」

優季「なに？どうしたの？」

安藤「どうしたの？」

土田「どうしたの？ユーモアなの？」

柳田「だから！ちがうんですよ！！本当に、これがうちの店の店長なんですよ」

安藤「あのね、どういうアレかわかんないけど、これ。」

土田「ユーモアだよね？」

柳田「本気です。本気とか本当です。事実です。」

土田「柳田さんなりのユーモアだよね？」

柳田「話きてました？今朝、店長が、ネズミになったんですよ。店長がみるみるうちに縮んでいって、鼻が前ににゅおっ  
てでてきて、爪が伸びて、ちっちゃい叫び声あげて、それで、ちいさいネズミになったんですよ。それで、わたしのスニーカー  
の、つま先に、乗って来たんです。助けてって。」

土田「(優季に手招きして) ちょっと」

優季「土さんー！」

土田に招かれて、優季と土田が安藤の部屋にはいる

土田「ちよっと考えさせて」

土田、柳田と安藤の部屋の間の襖を閉める。

【柳田の部屋】

柳田、3人に閉め出されてひとりになる。

床に座って、少し落ち着く。

カゴの中を覗いて、ネズミがいることを確かめる。

【安藤の部屋】

安藤「なになに」

優季「もうやだ、なんなの、あれ」

土田「無事か？無事か？」

安藤「なんなんですか？」

土田「ちよっと冷静になろう」

安藤「うん、冷静、」

優季「まず、ありえないよね、ネズミ？ありえないよね？」

安藤「ありえないよ」

土田「うん」

優季「ってゆうかあのカゴとかなに？なかったよね？」

土田「無かった！」

安藤「カゴ！無かった無かった！隣だから分かる！」

優季「ね」

安藤「準備周到なんだよ」

土田「準備？」

安藤「準備周到のいたずら」

優季「でもなんのために？」

土田「わたし、言うわ」

安藤「言うんですか？」

優季「言うの？」

土田「ガツンというわ」

安藤「やめさせてくださいよ」▼

▼土田、襖を開ける。

土田「じゃあ、そのカゴとか、どうしたの？偶然持ってたの？」

柳田「…そのゴミ捨て場に落ちてました」

安藤「偶然、そこに、落ちてた？」

土田「オーマイゴット」

柳田「落ちてたんでもん」

土田「オーマイゴットだこれ」

安藤「とんだほら吹き野郎だな！」

柳田「わたしだって、よくできてるなと思いましたがよ！まるで物語の主人公ですよ！」

安藤「主人公！？」

柳田「あ、ネズミになっちゃった！あ！カゴが落ちてる！そんなバカな！って」

安藤「大丈夫？」

柳田「ちよっと水のみます」

優季「あ、昨日ゴミ捨て場にあった気がする。」

安藤「え？」土田「え？」

柳田「ほら！」

優季「昨日家帰る時に、あ、カゴだって思ったの。このカゴだったかも。」

安藤「え」柳田「ほら！」  
安藤「カゴがあった？」  
優季「カゴはね、カゴはあったよ、あった」  
柳田「だから、あったんですよ」  
優季「だからその部分は本当かもしれないけど…」

沈黙

土田「ちよつと考えさせて」  
土田、再び安藤の部屋の襖を閉める。  
優季「考えさせて」  
優季も続いて安藤の部屋に入る。

【柳田の部屋】

柳田、また閉め出され一人になる。  
柳田「もう……なんなの……」

【安藤の部屋】

土田「ちよつと優季ちゃんだよ、カゴとか言ったの」  
安藤「そうだよ」  
優季「でもあったんだもん」  
土田「え？うん、え？」  
優季「え、だってカゴとかそういう問題じゃないじゃん」  
土田「うん、そう、そうなんだけど」  
安藤「分かった！」  
優季「え？」  
土田「言うの？」  
優季「言うの？」  
安藤「うん、言う」  
優季「言ってるね、ちゃんと」  
土田「ちゃんと言ってください」

安藤、襖を開ける。▼

安藤「人間は、ネズミにならない！」  
土田「…まあ、そうなのよ。」  
優季「そうなんだよ」  
土田「その通りなんだけど。」  
優季「なんでギダちゃんがこんなことを言いだしたかでしょ」  
土田「そうなのよ、なんで？」  
優季「なんで？」  
土田「理由があるんだよね？」  
柳田「…もう、なんでとかじゃないですよ。本当なんですよ。本当に、店長がネズミになったんですよ。じゃなかったら、わたし、ここにネズミ持ってこないですよ…」

間

優季「…ネズミが実際にいるっていうのが問題だよね」

一同、考え込む

安藤「…わたし部屋もどります。(ここが自分の部屋であることに気づく)ってゆうか下でやってください。下にいかないなら、わたしが下にいきます」

柳田「安藤さん、信じてくれないんですか?」

安藤「無理があるよ、柳田さん。いつさい、意図がわからない。」

柳田「意図とかないです!」

安藤「わたしも夜勤つづきで眠いんだよ。」

柳田「変態扱いですか?」

安藤「え?」

柳田「わたしは正直に見たことを言ってるだけなのに」

安藤「……」

柳田「その目、安藤さん、わたしを変態だと思ってますよね?」

安藤「思ってるよ!前から思ってたよ!おまえは変態だよ!」

柳田「前からってなんですか!」

安藤「明け方に呪文唱えてる時点でおかしいと思ってたんだよ!」

柳田「呪文じゃないです回文を考えてるんです!」

安藤「なんでもいいよそんなもんは」

柳田「毎日頭のストレッチを」

安藤「だからもうなんでもいいんだよ」

柳田「じゃあ、なんですか!わたしは嘘をついて、これその原っぱにいたネズミ連れてきましたとか言えば良かったんですか?わたしにはそんなことできませんよ。これは真正銘店長なんです。その証拠に。ここにこのネズミがいる限り、うちの店の店長は、行方不明扱いになりますよ。本当ですよ!」

安藤「……ばかじゃないの」

安藤、一階に降りていく。

柳田「もうやだ!」

優季「ねえ、このネズミ、全然動かないね」

土田「あ、優季ちゃんそんな近くで」

優季「あ!」

土田「嫌いなんですよ、ネズミ」

優季「店長さんだと思うとちよっと大丈夫」

土田「ネズミだよ」

柳田「店長すよ。朝はよく動いてたんだけど」

優季「弱ってるのかな?」

柳田「店長自体が相当弱ってたからね最近。連勤で。」

柳田「あー!ー!ー!ー!」

優季「なに!?!」

柳田「思い出した。ネズミになった瞬間の店長」

優季「……どうおもう?土さん」

土田「なに」

優季「ギダちゃん、嘘ついてるの？」

土田「嘘…ついでるよ」

柳田「ついてないですよ。もう疲れた…」

安藤の携帯が鳴る。

安藤、電話にでる。

優季「…でも、これ（ネズミ）、どうするの？」

柳田「どうするって」

安藤「あ、お疲れさまです。

優季「飼うの？」

…どうしたの？

土田「やめてよ！」

…え？細谷店長？

柳田「でも、外にほっぼり出すわけにはいかないですもん」

………今から？

土田「ふ、ふ、不潔だよ！」

………まあ行けるけど

柳田「不潔じゃないですよ」

………うん

優季「エサとかなに食べるのかな？」

………うん

柳田「店長はいつも廃棄のお弁当食べてたけど」

………うん

土田「気持ち悪いよ！」

………、本当に連絡つかないの？

柳田「なんでですか」

あー……分かりました。

土田「ネズミにお弁当食べさせないですよ！」

じゃあ今から30分……いや20分で着くから。」

柳田「でも店長に虫とか食べさせろっていうんすか」

土田「気持ち悪いよ！やめてよ！」

安藤、二階にあがっていく

安藤、二階が上がってきて自室に入り出かける準備を始める。

柳田「なんなんすか？」

土田「な、なんなんすか？」

優季「（安藤に）あれ、どこ行くの？」

安藤「仕事」

優季「は？仕事？」

安藤「うん」

優季「ちよっと、この状況で置いていかないでよー！」

土田「あれ、今日休みじゃ」

安藤「電話来て。うちの店舗にヘルプで来るはずだった細谷店長が来ないって」

柳田「……ほら」

安藤「連絡つかないらしい」

優季「え？細谷店長って」

柳田「連絡なんかつくはずないんですよ！ここにいますよ！」

安藤「うるさいよ！とにかくいってくるから」

安藤、玄関へ。

↓アラームが鳴る。

各々、アラームの音に反応する。すこし戸惑うが、それぞれの部屋に戻りアラームを止める。

土田が部屋からでてきて、柳田の部屋のドアをノックする。

【安藤の部屋】

安藤は部屋でポスティングの内職の仕事をしている。

土田「ギダちゃん今大丈夫？」

柳田「あ、はい。もう出ますけど。」

土田「うん。そういえばさ、ライブの日のシフトどうだった？」

柳田「あーそうだ。まだ見れてないんですよ。きのう店長のことで大変だったんで」

土田「あー……そっか。あ、いつ分かりそう？」

柳田「今日見てきますよ。でも、店長いなくなった分埋めなきゃやばいと思うんで。」

土田「……うん。分かったら教えてね。」

柳田「はい」

柳田バイトに行くユニフォームを着ながら、

【玄関】

木下がキャリーバッグを引いて、家にはいつてくる。

安藤の部屋の襖を開ける。

柳田「安藤さん、爪切り貸してもらっていつすか」

安藤「ない」

柳田「ないんすか」

安藤「なんでないの」

柳田「見つからないんすよー」

柳田「(カゴの中に対して) いつてきます。」

柳田、一階へ降りていく。

柳田、階段を降りると、一階に木下の姿をみつける。

柳田「……え？……木下さん？」

木下「よ」

柳田「どうしたんですか?!?なんで？」

木下「ああ」

柳田「え？」

木下「うん」

柳田「……えっと、その荷物」

木下「わたしの部屋、まだ空いてるよね？」

柳田「え？空いてますけど」

木下「また、住むわ、ここ」

柳田「住むんですか？」

木下「うん」

木下「今日、優季ちゃんいないの？」

柳田「見てないですけど」

木下「そう」

木下、階段を上がっていく。↓【階段、及び201号室】

木下「言わなくちゃ。戻って来るって。市村さんにも、電話しなくちゃ。あ、明日でいいかな？」  
柳田「え？」

木下「明日でいいよね？」

安藤が声を聞きつけて、自室から出て来る。

安藤「え?!木下さん?」

木下「…」

安藤「え、なんで?実家帰ったんでしょ?」

木下「…やめました」

安藤「やめた?」

柳田「なんで?」

木下「またここ住みます。またお世話になります。」

安藤「やめたってなに?ここは?市村さんは知らないんでしょ?」

木下「知らないですけど、明日言うんで大丈夫です。」

安藤「大丈夫ってなにが?」

木下「大丈夫ですよ」

安藤「いくらここゆるいからって…:ちゃんとしなきゃだめでしょ」

木下「大丈夫ですよ。」

安藤「大丈夫って。木下さんが決めることじゃないんだからさ。色々あるでしょ、また勝手にまた住むって」

木下「嫌なんですか?」

安藤「え?」

木下「嫌なんですか?わたし、ここにいたらだめですか?」

安藤「……」

柳田「全然嫌じゃないですよ」

柳田「むしろ嬉しいですよ。わたしは。一部屋空いて寂しかったし」

安藤「……」

木下「はい。……(柳田に)バイト行くところじゃないの?」

柳田「あ、行きます。」

木下「行きなよ、遅刻するよ」

柳田「あ、じゃあ木下さんまたあとで」

木下「いってらっしゃい」

柳田「あ、いってきます」

安藤と木下が残される。

安藤「大丈夫なの?家」

木下「……」

安藤「なに?やめたって」

木下「……」

安藤「……ちゃんとしたほうがいいよ」

安藤、部屋に戻る。

木下が201の自室にひとりになる。電気をつけてみる。すぐに消す。

水を取りに一階のキッチンへ行こうとする。

【階段】

土田の部屋の扉が開く。

土田「どうも」

木下「あ、どうも、あの」

土田「いいんですよ」

木下「え？」

土田「見たから、ここで。安藤さんこわいね。」

木下「ああ」

土田「わたし、嫌じゃないよ、ふふふ、木下さんいても」

木下「ははは」

土田「わかるよ、色々大変なの」

木下「はあ」

土田「わたしもさ、19歳の時、家飛び出したんだよね、それから10年実家帰ってないよ。」

木下「そうなんですか」

土田「ふふふ、バンドマンやるっていつて実家飛び出したんだよね」

木下「へえ・・・」

木下、一階へ。そして水をくんであがってくる。土田が待っている。

土田「どうなったんだと思う？」

木下「え？」

土田「ふふふ、わたし楽器ひいたことなかったんだよね」

木下「どういうことですか？」

土田「わたしものすごく音痴だし、楽器ひいたことなかったんだよね。なんかお茶目だよ。でも、わたしも若かったし、熱意があったよ、ものすごく。だから、毎日下北沢のロックヤードっていうライブハウスの前で野宿したんだよ。（手に持っているポツキーを差し出す）あ、食べる？」

木下「いや」

土田「食べて？」

木下、一本食べる。

土田「知ってる？ ROCKYARD。」

木下「しらないです」

土田「そうだよ。今はもうないんだけど。毎日、近隣の方にゴミのように扱われたんだけど。」

木下「なんで野宿・・・？」

土田「バンド仲間と出会うために」

木下「ああ」

土田「1週間が過ぎたとき、ある男の人がわたしに声をかけたの。邪魔ですよって。ひどいよね。ひどいよね。わたしがそれで、困惑したら、そこにもうひとりの男の人がそこに来て言ったの「そこにいられたら迷惑です」って。ひどいよね。ひどいよね。それで、もうひとりそこに男の人が走って来たの。それで言ったの「良ければ僕たちのライブ見ていきませんか。タダでいいから。それでお引き取りください。」って、言ったの。もうすごいよね、すてきだよ。」

木下「……」  
土田「もう分かるよね？」  
木下「え？」  
土田「それがスカハイだったねん。TKだったねん！」  
木下「あー」  
土田「それがスカハイとの出会いだったよー」  
木下「すごい出会いですね」  
土田「すごいんだよー運命的感動的だよー情緒的だよーすごいよー」  
木下「……」  
土田「だから、木下さんが、実家飛び出してきたの分かるよ、譲れないことってあるよね」  
木下「いや、わたしは、そういうんじゃない」  
土田「うんうんうん」  
木下「そんな若くないですし」  
土田「ふふふ。木下さん、木曜暇？」  
木下「なんで？」  
土田「スカハイのライブがあるんだけどね、行く？」  
木下「あー」  
土田「そうそう」  
木下「んー」  
土田「んー？」  
木下「考えときます。」  
土田「うんうん、そっかそっか。無理しなくてもいいよ。」  
木下「はい」  
土田「行くことにしたら言っただけね。チケット二枚あるから」  
木下「はい」  
土田「じゃあ、ゆっくり休んで。あ、なんかあったら話きくよ」  
木下「ありがとうございます。」

↓アラームが鳴る。

各々、それぞれの部屋に戻りアラームを止める。木下はそれを見ている。

【安藤と柳田の部屋】

安藤は自室で内職をしている

柳田はカゴの中のネズミを見ている

柳田「安藤さん……安藤さん」

柳田が襖をあける

安藤「そこ開けないでよ」

柳田「痛々しいつすよ」(ネズミみてる)

安藤「そこ、壁だから」

柳田「痛々しくて見てられないんですよわたし」

安藤「ここ、壁だと思ってもらってもいい？」

柳田「こうやってみると、何考えてるのか分かる気がするんですよ」

安藤「……」

柳田「あんな人間じゃないみたいなき方するくらいなら、ここでこうやって寝てるほうが幸せかもしれないですよ」

安藤「もうやめなよ、それどっかに逃がしなよ」

安藤、襖を閉める

柳田「人間は人間じゃなくなっちゃうんですね」

安藤、内職を再開する。

柳田が安藤の部屋を隙間から覗く。

安藤「なに？」

柳田「……」

安藤「なーに？」

柳田「安藤さんってすごい働いてますけど、なんでなんですか？」

安藤「そんな働いてないよ」

柳田「だってそれ内職とか。すごい働いてるじゃないですか」

安藤「関係ないでしょ」

柳田「関係なくないつすよ。同じ屋根の下じゃないですか」

安藤「柳田さんだっすよ、すごい働いてるじゃん」

柳田「わたしですか」

安藤「うん」

【木下の部屋(201)】

優季はボールペンで桃缶を開けようとしている。

優季「じゃあ、夜行バス乗った？」

木下「え？ああ、乗ったよ」

優季「なんだっけ？鬱蒼としてた？」

木下「ああ、鬱屈ね、してたよ」

優季「まじかー」

木下「今度優季ちゃんもどっか行って来なよ」

優季「夜行バス乗って？」

木下「そう」

優季「やだよ、臭そうじゃん」

木下「別に臭かないよ」

優季「そ？」

木下「うん」

木下「でも、ほんと、ありがとうね」

優季「え？ああ。いいよ全然。」

木下「助かった」

優季「ううん。だって空いてるんだもん。ママも普通に

「あー、いーよー」って言ってたし」

木下「ふふ」

優季「木下さん、またコンビニで働くの？」

木下「わかんない」

優季「フーン。家賃払えるの？」

木下「払うよ、なんとかして」

優季「あ、優季は別にいいんだけどね」

木下「はは。優季ちゃんはいいいね」

優季「……ねえ、これ開かない」(桃缶)

木下「開かないでしょ、それじゃあ」

優季「ふふ」

優季「実家もどって、親に会ったの？」

木下「会ったよ」

優季「ふーん。元気だった？」

木下「いや？」

優季「ふふ、なにそれ？」

木下「貸して」(桃缶)

優季、桃缶を渡す。

優季「つてゆうか、なんでこんな古い桃缶あったの？2017年とかいつの」

木下「え、わたしじゃないよ」

優季「え、だって、この部屋にあったんだよ」

柳田「わたし暇なんで」

安藤「暇？」

柳田「まーそうですねー。暇で暇で、暇で暇で仕方ないですよね」

安藤「へえ」

柳田「お金貯めるくらいしか」

安藤「いいんじゃないお金」

柳田「いいですかね」

安藤「うん」

柳田「あと、まあーいつかタケさんと住もうと思ってるので。帰って来たら」

安藤「ああ」

柳田「はい」

安藤「でも、ずっと会ってないんですよ」

柳田「まあ」

安藤「彼は、帰って来れるの？」

柳田「わからないですけど」

安藤「そう」

柳田「あと少し、死ななければ」

安藤「連絡とれないの？」

柳田「取れますよ、向こう携帯使えるっばいんです。」

安藤「取れるんだ」

柳田「でもほんとたまにですけど」

安藤「へえ、大変だね」

柳田「まあ仕方ないですよね」

柳田「死ぬくらいならネズミになってほしいですね」

安藤「うそ」

柳田「え」

安藤「え」

柳田「わたしネズミ好きなんで」

安藤「もうネズミの話やめて、お願いだから」

安藤、襖を閉める。

木下「つていうか缶切りの？」

優季「ないの。今度家から持って来よ」

木下「いいの？持って来ちゃって」

優季「いいですよ」

優季「……ねえ、言っでなかつたんだけどさ」

木下「ん？」

優季「優季、今、浅野なんだよね」

木下「なに？」

優季「浅野優季。また結婚したんだよ。うちのママ。3ヶ

月前なんだけど」

木下「忙しいね」

優季「ホントだよね。でも優季は市村のままなんだけど、もう変えないって決めたから。」

木下「ふうん決めれるの？」

優季「つてゆうか、優季がそう名乗らなければ良いわけじゃん。」

木下「まあね」

優季「うん。いちいち結婚しなければいいのにさ、どうせまた別れるんだから、彼氏でいいじゃんね」

木下「たしかに。でも市子さんは結婚したいんだ」

優季「そう。不安なんだつて。結婚してない」と

木下「へー。珍しいね」

優季「古いよね？」

木下「うん、なんか昔の人つてかんじする。ちょっと」

優季「たしかに」

木下「結婚式もするの？いちいち。」

優季「しないよ。うちお金ないもん。」

木下「あー」

優季「でも、誕生日会みたいなのはするんだけど。白いケーキ買って来て、ロウソクたてて、吹き消すの。」

木下「白いケーキ？」

優季「そう、ショートケーキとか、ホワイトチョコケーキとか。優季も絶対いなきやいけないんだけど、その儀式には。今までね、何人もお父さんが同じように、ロウソク吹き消してきてて、それ見てると、変なデジャブ感つていうか、あれ？何回目だっけ？みたいな。今いつだっけ？みたいになるの。」

木下「すごいね」

優季「そー意味のない儀式。そうやってね、しばりつけるんだよ、うちのママ。あたしそういうところ本当怖いなって思うもん。」

木下「それ優季ちゃんに遺伝してないの？」

と云いながら木下、部屋から出る。

優季「してないよ！やめてよ！」

【廊下】

木下、トイレに行こうとする

優季「あ、トイレ？今流れないんだよ、下のしか使えない」

木下「え、そうなの？」

木下、階段を降りてトイレへ行こうとする。

柳田の部屋のドアは開いていて、柳田が抱えているカゴが木下の目に入る。

木下「店長？」

柳田「え？」

優季「え？」

柳田「…木下さん、今なんて言いました？」

木下「いや、ごめんなんでもない」

優季「え、木下さん」

柳田「木下さん！今、なんて言ったんですか？」

木下「あ、いや、店長って言ったけど。ごめん、なんでもない」

柳田「分かるんですか！木下さん！」

木下「え？いや、なんか分かんないけど細谷店長が（いる気がした）」

柳田「そうなんですよ！店長なんですよ！木下さん！このネズミが店長なんですよ！」

柳田、木下を自室へ引つ張りカゴの中のネズミを見せる。

木下「え？なに言ってるの？」

柳田「何言ってるのは木下さんじゃないですか！」

木下「よくわかんないよ！こわいよ！なんでネズミいるの？」

柳田「だから、本当なんだって、聞いたか優季ちゃん！」

優季「聞いた聞いた聞いた！」

安藤が襖を開ける。

安藤「静かにしてよ！」

優季「安藤さんやばいよ」

柳田「安藤さん証明されましたよ」

安藤「ありえないから！」

優季「聞こえてたの？」

安藤「聞こえるわ全部」

柳田「今、この時点で、優季ちゃんが信じてないとしたら2対2なんで、今、フェアな状況です。」

木下「ちよつと状況全然理解できない」

柳田「正直ちよつと、時間が立つにつれて店長がネズミになったことに自信なくしてたんですけど、ありがとうございます！」

安藤「木下さん、本当にこれが店長だと思ったの？」

木下「ちよつと、どういうことですか？」

安藤「ほら、違うんじゃない」

柳田「でも、さっきそういつてたから」

安藤「土田さんいないの？」  
優季「今日早番の日じゃない？」

安藤「土田さんが帰って来たら2対3だから」

柳田「そういう問題じゃないですよ」

安藤「え？」

柳田「これが店長だっていう主張がわたし一人じゃないっていうことが重要なんですよ！ひとりとふたりでは全然意味が違いますから。わかります？」

安藤「ななな」

優季「いや、ってゆうか、なんで木下さんが、今店長って言ったかでしょ」

柳田「そうだよ、なんでですか？」

優季「なんで？見えたの？」

木下「見えたっていうか、よぎった？」

柳田「よぎった？ここを？」

木下「いや、脳裏を。っていうか、すごく強烈に思い出したっていうか」

優季「急に？」

木下「そう、急に、え、店長、ネズミになったの？」

柳田「はい」

木下「え、細谷店長？今、店にいないの？」

柳田「三日間行方不明です。まあここにいるんですけど」

木下「そうなんだ」

安藤「そうなんだ？！そうなんだじゃないでしょ？おかしいでしょ」

木下「そうなんですけど。なんて言えばいいかわからないんだけど……もしかしたら、わたしが店長ネズミにしたのかもしれない」

一同、黙る

柳田「きましたよ、これ」

優季「なに！？なんで？」

木下「だとしたらどうしよう」

安藤「なにいつてんの？」

木下「だとしたら、わたし、すごいショックだ」

安藤「ショックもなにも」

柳田「そう思う根拠があるんですか」

木下「いや……ちよつとトイレいい？」

木下一階のトイレへ。それを柳田、優季が追いかける。

優季「なんで今！」

柳田「だめですよ！」

優季「ちよつと木下さん！」

木下、トイレにはいつてしまう。

柳田「なんでなんですか！」

↓アラームが鳴る。一同少し迷うが、アラームをとめにいく。

木下がトイレから出て来る。

安藤が二階の洗面台に顔を洗いに来る。

木下が階段をあがって、部屋に入る。

安藤、一階へ降りる。↓【一階台所】朝ごはんの準備をする。

柳田が一階におりる。冷蔵庫から飲み物を出す。

木下が部屋からでてきて歯ブラシをとり、歯を磨き始める。

柳田があがってくる。

柳田「木下さん、仕事また始めるんですか？」

木下「首をかしげる」

柳田「さすがにコンビニは嫌ですよね」

柳田「今日11時間労働なんですけど。どういふことつすか11時間で」

木下「……」

柳田「労働基準法はどうなってるんすか。」

柳田「わたしも辞めたい。ネズミになりたくないです。」

木下、少し吹き出す。

柳田「もうこれ冗談じゃないですよ。本社にいったほうがいいのかな。」

木下、首を横にふる。

柳田「そんなこと言ったらクビになるかな。ってゆうか、細谷店長だけなんですかね？もしかしたら他にもいるんじゃないですかね。ニュースとか。うちテレビないから、世間から隔離されてるじゃないですか。テレビないとだめだよつば。テレビほしつすよねーテレビー。」

木下、口を濯ぐ。

土田、部屋からでてくる。

土田「あ、おはようございます。」

木下「おはようございます。」

柳田「あ、土さんに昨日の話しました？」

木下「いや」

土田「なに？」

柳田「あの、昨日、木下さんが店長を」

土田「あ」

木下「あ、また帰って来たら。仕事でしょ、土さん」

土田「そうなの。行くわ」

木下「いつてらっしやい。」

土田「いつてきます。」

土田、降りていく

土田「あー!!」

土田戻って来る

土田「ギダちゃん、明後日のシフトどうだった？」

柳田「あースカハイですよ。すいません入ってました」

土田「え……（木下を見る）」

木下「あ、すいません、わたしもまだちょっと」

柳田「一回行きたいんですけどね、ライブ」

土田「……」

土田、出て行く。

木下と柳田は顔を見合わせる。

木下「そーいや持って来るっていつてたよ」

柳田「なんすか」

木下「テレビ、ゆきちゃんが」

柳田「うそ、なんで」

木下「実家から持って来るって」

柳田「まじっすか。ゆきちゃん様!」

木下「ねー」

柳田「実家のテレビはどうなるんだろ。」

木下「さあ……二個あるんじゃない?でもなんか、運べないのがやばいって言った。」

柳田「あー車かー運転できねー」

安藤、二階へあがってくる。手には牛乳とパン。

柳田「おはざっす」

安藤「おはよう」

柳田「安藤さん、免許持ってます?」

安藤「持っていない」

安藤「柳田さんさ、昨日お風呂の栓、そのままだったよ。」

柳田「あ、すみません」

安藤、木下を一瞥して自室に入る。

木下「ギダちゃんさ、帰ったりするの?」

柳田「え」

木下「実家」

柳田「ああ、実家なくなったんですよ」

木下「なくなるの」

柳田「なくなりましたね。」

柳田「木下さん実家どこでしたっけ」

木下「福島」

柳田「へーわたし行つた時ないです。いいところですか。」

木下「普通」

柳田「おいしいものとかあるんですか」

木下「わかんない。東京の方があるんじゃない。」

柳田「へー。寒いですか」

木下「別に。」

柳田「鳥取寒いですよ。寒くてなんもないです。」

柳田、時間を見る。

柳田「いこ」

木下「あ、廃棄もらってきて」

柳田「何がいいですか？」

木下「タバコ」

柳田「それはー無理っすね」

木下「いつてら」

柳田「はーい」

柳田、出て行く。

安藤が準備を終えて部屋から出て来る。

安藤「いってきます。」

木下「いつてらっしやい」

安藤、階段を降りかけて立ち止まる。

安藤「木下さんさ」

木下「はい」

安藤「なにしてるの？」

木下「え、なんも、してないですけど。」

安藤「ああ、うん」

安藤「本当、なんで戻って来たの？」

木下「……」

安藤「なんかあったの？」

木下「……」

安藤「親御さん大丈夫なの？」

木下「……」

安藤「もし、あれだったら」

木下「安藤さんには別に関係ないじゃないですか」

安藤「……そうだね」

木下「はい」

安藤「全然関係ないね」

木下「……」

安藤「いってきます」

木下「……」

安藤、出て行く。玄関のドアが閉まる。

木下「いつてらっしゃい。」

木下、ひとりになる。

それから、誰もいない家の中を歩き回る。

全ての部屋の中にはいつて、何かいじったり、ねっころがったりしてみる。

柳田の部屋では店長に話しかける。

木下「店長ー」

襖を開けて安藤の部屋にはいり、布団にダイブする。

声を出してみる。

木下「あーあー」

それから、鼻歌を歌いだす。

安藤の部屋の押し入れを開けてみる。

木下「ばーん」

と、ホルマリン漬けの指のはいった瓶をみつける。

木下「なにこれ」

スタンドライトをつけてその下に置いてよくみる。

木下「おえ」

そのままにして安藤の部屋を出る。

土田の部屋にはいつて、寝ころがってみる。

↓アラームがなる。

各々、部屋に戻ってきてアラームを止める。

木下はそれを見ている。

【安藤の部屋】

安藤が自室で、指の入った瓶が移動していることに気付く。

土田が安藤の部屋のドアをロックする。

土田「安藤さん、安藤さん」

安藤、瓶を元の場所にもどす。ドアを開ける。

安藤「なんですか？」

土田「安藤さん、明日って、仕事ですか？」

安藤「仕事です。」

土田「仕事ですか？」

安藤「仕事です。」

安藤、ドアを閉める。・洗い物のカップが目について、持ってキッチンへ。と、土田がドアの外にいる。

土田「何時からですか？」

安藤「え？9時、よる」

土田「あー9時かーギリギリだなあ。」

安藤「なんですか？ギリギリって」

安藤に続いて土田も一階へ降りていく。

土田「でも6時半だから、2時間だったとしても、20時半で、すぐ電車のれば、」

安藤「なんですか？」

土田「ギリギリでも、間に合うと思うんですけど」

安藤「え？」

土田「安藤さん、スカハイのライブ、一緒に行きましょう。」

安藤「なんでわたしなんですか？」

土田「どいつもこいつもダメなんですよー」

安藤「木下さん暇でしょ」

土田「なんか考えとくっていつて、全然答えがでないんですよ。もう、安藤さんしかいないんですよ。お願いします。チケットはもちろんプレゼントしますし」

安藤「土田さん」

土田「今度、飯おごります」

安藤「いや」

土田「デザートつけます」

安藤「ちよっと」

土田「交通費だします交通費だします！」

安藤「間に合わないですもん仕事！」

土田「でも」

安藤「そんなわたしに奢るくらいなら一人で行けばいい

【木下の部屋】

柳田「だって、あれじゃただのネズミじゃないですか……やっぱどこか、報告したほうがいいんじゃないかと思うんですよ。」

木下「でも、どこに？」

柳田「警察とか」

木下「警察？」

柳田「警察じゃなくても、どっか」

木下「どこ？」

柳田「政府とか」

木下「政府?!」

柳田「だって」

木下「それはだって」

柳田「そうですけど」

木下「あはは」

柳田「でも、本社にいつても、信じてくれなかったですもん」

木下「まあそうでしょ、でもだからって」

柳田「そうですけど」

木下「頭おかしい人だと思われて逮捕されるよ」

柳田「逮捕？」

木下「信じてもらえないよ」

柳田「でも本当なのに」

木下「本当にみたの？」

柳田「え？」

木下「その、現場を。嘘なんでしょ」

柳田「木下さんまでそんなこと言うんですか」

木下「だって」

柳田「木下さんだって、言ってたじゃないですか。」

木下「いや、あれは」

柳田「木下さんが店長をネズミにしたんですよ」

木下「だから変なこと言ってごめんて」

柳田「そうじゃないにしても、木下さんが店長をネズミだと思ってたのは正しかったんですから」

木下「ネズミっぽいな、ね。わたしは思ってたただだから」

柳田「思ってたらネズミになったんですよ。」

木下「たまたまだよ。」

柳田「すごいことですよ。わたしも店長異常に疲れてるなと思っただんですけど」

柳田「この件については一緒に戦いましょうよ」

木下「やだよ、やめてよ」

柳田「現に、店長はあのまんまなんだし」

木下「でも」

じゃないですか」

土田「……動員数が」

安藤「なに？」

土田「動員数伸ばさないといけなくて、今回のライブが勝負なんですよー！」

安藤「勝負って」

土田「お願いしますよ」

安藤「無理です。」

土田「お願いします。安藤さん」

安藤「ごめんね土田さん」

土田「うう……」

安藤、二階へあがっていく。

優季が玄關から入って来る。

優季「なにしてるの？」

土田「……」

優季「飴いる？」

土田「いや……」

★優季階段を上がり、木下の部屋に行く。

土田、キッチンに一人になる。

土田「あ……」

土田、二階にいる優季に向かって話しかける。

土田「優季ちゃん、明日のライブ、一緒にいかない？」

優季「え、いいよ」

土田「え、いいの?!」

優季「うん、明日暇！」

土田「優季ちゃん様！」

優季「え、いいよチケットくれるんでしょ？」

土田「うんうん、もちろんだよ」

優季「じゃあいくー」

土田「ありがとうありがとう！ありがとう！」

優季「いいよ、あ、そうだ、ねえ土さん、あれ聞いた？」

土田「なに？」

優季「木下さんが、店長さんをネズミにしたって話」

土田「なにそれ！」

柳田「わたしの部屋にいるんですから」

木下「うん」

柳田「大変なことですよ。わたし每晚同じ部屋で寝てるんすよ」

木下「うん」

柳田「あの細谷店長と、一緒に寝てるんすよわたし。どうなんですかそこんところ」

木下「エロいね」

柳田「えろ……」

木下「もう逃がしちゃえばいいじゃん」

柳田「逃がす？」

木下「外に。」

柳田「でも、そしたら証拠が」

木下「証拠なんていらナイよ。」

柳田「でも、そしたら、もうこの事件が世間にはでないってことになるじゃないですか」

木下「そうだよ」

柳田「それでいいんですか？木下さんは。」

木下「いいよ、別に」

柳田「木下さんの中の正義感はどこにいったんですか？」

木下「ないよ、そんなもん」

柳田「ないはずなんです。」

木下「あたしの正義感のなに知ってるの」

柳田「ううう。」

★優季が入って来る。

優季「いた。飴いるひと？」

木下・柳田「あ、ありがとう」

優季が飴を投げて、それをふたりが受け取る。

優季は出ていく。

木下「あげる」

木下、優季にもらった飴を柳田に渡し、タバコを吸う。

優季「あそつかー土さんいなかったから！ちよつと来て。」  
二人、和室へ移動して座る。

優季「こないださ、土さんいない時に、木下さんが、あの  
ネズミみて、店長？って言ったんだよ」

土田「なんで？」

優季「それで、そのあと、店長をネズミにしたのはわたし  
かもしれないって言いだして」

土田「なにそれ！」

優季「なにそれでしょ！」

土田「うん！」

優季「すごいんだよ。なんかね、ちよつと前に、木下さん  
もまだギダちゃんと同じコンビニでまだ働いてた時に、店  
長さんが、クレーム受けたんだって、笑顔が気持ち悪いん  
ですけどって」

土田「笑顔がきもちわるい？」

優季「そう。接客する時の笑顔が気持ち悪いって」

土田「えー」

優季「で、それから、笑顔の練習し始めたんだって。そし  
たら逆にどんだん笑顔が気持ち悪くなっていつちやってね、  
たぶん気にして、店長さん。無理矢理笑おうとして」

土田「かわいそうじゃないか」

優季「そうそう。で、それからなんか言動とかおかしくて、  
その店長みて、木下さん、なんか店長、最近ネズミっぽいなっ  
て思ったんだって。」

土田「それで？」

優季「だから、それがひとつ原因なんじゃないかって」

土田「えー？」

優季「だって、ネズミみたいだなんて思ってたら本当にネ  
ズミになったんだよ？びっくりしない？」

土田「んー、する。するね」

優季「でしょ、すごいね理不尽なクレームとかにもね、ば  
かみたいに謝ってたんだって。お弁当をもらったためて持ち帰っ  
たら、持ち帰る間に冷めたんですけど、とか」

土田「はー」

優季「もっかい温めろ！！はいーすみませんー的な」

土田「へーふつうじゃない？」

優季「え？ふつうじゃないでしょ」

優季「しかも、店長さん、全然休みがなかったんだって。  
10時間夜勤10連勤とかだったらしいよ」

土田「10連勤？」

優季「そう」

土田「ふつうじゃない？」

優季「ふつうじゃないでしょ」

土田「え、ふつうじゃない？」

柳田「……これは大事件なのに……すごい事件の真ん中  
にいるんだな。」

木下「……ギダちゃんさ、もう忘れなよ。このこと」

柳田「なんでですか？」

木下「他に大事なことがあるでしょ」

柳田「ないですよ」

木下「ないのか」

柳田「ないです」

木下「ないなら仕方ないね」

柳田「そうなんですよ」

木下「そうかー」

柳田「これ、わたしの人生でいまのところ二番目くらいに  
やばい出来事ですね。」

木下「え、一番なに？」

柳田「それはいえないうすよ」

木下「え、なによ」

柳田「言わないですよ」

木下「なんでよ」

柳田「言えないですよ、そんな簡単に」

木下「じゃあいいや」

柳田「え、いいんですか？」

木下「うん、いいや。」

柳田「聞きたいですか」

木下「聞きたくない」

柳田「え、聞きたそうだったじゃないですか」

木下「もういいや」

柳田「いいですよ、おしえてあげますよ」

木下「もう良いつてば」

柳田「え、なんでするか、聞いてくださいよ」

木下「聞きたくない」

柳田「えーちよつと言いますって」

木下「なに？」

柳田「え？」

木下「なに？一番のこと」

優季「ふつうじゃないでしょ」  
土田「ふつうじゃない、か」  
優季「だって全部夜勤なんだよ」  
土田「んー」  
優季「昼夜逆転だよ」  
土田「そうだよ、ね。」  
優季「夜行性になっちゃ．．．あー！」

★優季、勢いよく二階へ上がっていく。

柳田「え、そう聞かれるとちよっと。」  
木下「は？なにそれ、言えよ」  
柳田「木下さん聞き方悪いっすよ」  
木下「は」  
柳田「もつとなんか聞き方あるじゃないですか」  
木下「なんだよそれ」  
柳田「人には話したくなる聞き方っていうもんがあるんですよ」

★優季が急にはいつてくる。

優季「夜行性だから！」  
木下「え、なに？」  
優季「店長さん、夜勤で夜行性になって、ネズミになったのかな」  
木下「ああー」  
優季「ネズミって夜行性だもんね」  
木下「たしかに」  
優季「ね！」

★優季、戻って来る。

優季「言ってきた。夜行性って」  
土田「え？」  
優季「ネズミも夜行性だからさ、店長夜行性になって、ネズミになったんじゃないかと思って」  
土田「ああ、なるほど」  
優季「なぞがとけたねー」  
土田「うんー優季ちゃんはすっかり信じてるんだ」  
優季「すっかりってわけじゃないけど、」  
土田「うん」  
優季「本当だったら面白くない？」

間

土田「わたしも夜勤だけだね」  
優季「たしかに。」  
土田「うん」  
優季「ネズミになりそうな気配ある？」  
土田「今のところ無いけど」  
優季「じゃあ大丈夫じゃない？」  
土田「そうかな？」  
優季「うん。土さんにはスカハイがあるねし。」  
土田「うん！」  
優季「あ、明日なんじ？」

★優季、部屋を出ていく。

柳田「夜行性？」  
木下「まあ確かに、夜勤続きだったもんね」  
柳田「わたしも夜勤続きですよ」  
木下「ああ」  
柳田「そうですよ、ギダですよ」  
木下「大変？」  
柳田「大変ですよ、そりゃ。わたしだってネズミになりそ…」

木下「やめてみてわかったけど、人間は夜に働いちやいけなと思うわ」  
柳田「……」  
木下「昼に起きて、夜に寝ないと、人間じゃないよね」  
柳田「……」  
木下「どうしたの？」  
柳田「……」

土田「あ、明日ね。18時半開場19時開演なんだけど、下北沢ライブハウスでね、駅からあるいて8分くらいのところなんだけどね。ちよつと早めに行っておきたいんだ。

16時に駅でもいいかな？」

優季「16時？」

土田「15時半？」

優季「いや、早くない？」

土田「でも並んで一番前の列いけなかったらどうする？」

優季「どうするって」

土田「どうする優季ちゃん」

優季「優季は別にいいもん」

土田「うん？」

優季「じゃあ、いいけどさ、でも学校あるから。下北でしょ。

16時半ね」

土田「うん分かった。ありがと。早く行くと、物販先に

買える可能性があるよ」

優季「うん、うん」

土田「うん！優季ちゃんゼリー食べる？」

優季「いいよゼリー」

土田「あるよ。ゼリー」

土田、部屋にゼリーを取りに二階へ。

優季「え？冷蔵庫じゃないの？」

★柳田が勢いよく階段を降りて来る。

優季「なになに？どうしたの？」

柳田、玄関から外に出ていく。

木下「なんかギダちゃん、バイトやめるって」

優季「え？なにそれ？（外へ）ギダちゃんー？」

土田「どうしたの？」

木下「いや、ちよつと…」

↓アラームが鳴る

各々、部屋に戻ってアラームを止める。

柳田は戻ってこない。

柳田「やばい、わたしやばいですね、わたし、ネズミになる可能性ありますよね」

木下「は？」

柳田「わたしだって、夜勤で連勤してますよ。疲れてるし。

わたし、ネズミになる可能性ありますよね。」

木下「ならないでしょ」

柳田「なる。なる。爪も、伸びてきてる気がする。朝より。

伸びてる。」

木下「ちよつとギダちゃん」

柳田、立ち上がる。

柳田「わたし、バイトやめますわ。バイトやめます。」

木下「ちよつとギダちゃんー!!」

★柳田、階段を下りていく。

木下「ちよつと」

木下が二階からネズミのカゴを持って一階に降りて来る。

玄関をあけて、外にでてネズミを逃がそうとカゴの蓋を開ける。

と、安藤が降りて来て、キッチンでお湯を沸かす。

木下がカゴを持って、家の中に入る。

木下「あ」

安藤「え、なにしてんの？」

木下「あ」

安藤「逃がしたの？」

木下「いや」

安藤「ネズミ」

木下「いや．．．そう思ったんですけど、」

安藤「逃がさなかったの？」

木下「はい」

安藤「え、あ、そう。じゃ、いるの？」

木下「はい」

安藤「ネズミ」

木下、頷く

安藤「なんで逃がさなかったの」

木下「んー．．．なんで。途中でギダちゃんの顔思い出して」

安藤「うん」

木下「怒るかなって」

安藤「そりゃあそうかもしれないけど」

木下「なんか、奪っちゃう気がして。」

安藤「なにを」

木下「何を？わかんないですけど」

安藤「たのしみ？」

木下「たのしみっていうかなんか…」

安藤「だってただの遊びでしょ」

木下「遊び？」

安藤「流行りつていうか、柳田さんの中での。(紅茶を)飲む？」

木下「ああ、はい。．．．でもそれにしては、すごかったですよね」

安藤「ああ」

木下「信じ方が。信じ方っていうか。」

安藤「うん、わかるけど」

木下「うん．．．なんなんですかね…？」

安藤「わたしに聞かないですよ」

木下「……戻してきます。」

安藤「戻すの？」

木下「だって」

安藤「でも」

木下「安藤さん逃がします？」

安藤「嫌だよ。やらないよ」

木下「じゃあ戻してきます。」

安藤「……」

木下、階段をあげる。

安藤「木下さんさ、わたしの部屋も勝手に入った？」

木下「え……」

安藤「わたしの部屋」

木下「はいったことないです。」

木下、二階の柳田の部屋へカゴを戻してから戻って来る。

木下「あ、すいません、はいりました。」

安藤「……ああ」

木下「あれ、なんですか？」

安藤「え？ああ」

木下「ゆび？」

安藤「え？」

木下「だれの？」

安藤「わたしの」

木下「でも」

安藤「わたしの」

木下「……ああ」

安藤「……昔6本あったから左手」

木下「すいません。」

安藤「いいんだけど。別に隠すことじゃないから。」

木下「はい」

木下「大事なんですか」

安藤「え」

木下「こっちに持って来るくらい」

安藤「まあ、別に。だって。自分の、身体だからね」

木下「はい」

安藤「ふつうじゃない？」

木下「……」

安藤、二階の自室に戻る。

↓安藤の部屋のアラームが鳴る。柳田と土田のアラームは鳴らない。

【二階和室】

土田が机につつぶしている  
それを木下がみてる

しばらく沈黙（解散した話を聞いたあとの設定）

土田「生きていけないよ木下さん」

木下「生きていけないんですか」

土田、頷く

土田「わたしこれからどうやって生きていけばいいの」

木下「どうやってって」

土田「メンバーが心配だよ。これから彼らはどうしていくの」

木下「さあ」

土田「心配だよお、彼らの生き甲斐は音楽なんですよ。」

木下「うん・・・」

土田「音楽を、世界を、愛していたんだよ」

土田「本当に良い曲つくってたのに。なのに作っても作っても、全然聞いてもらえないじゃないですか！だから・・・」

土田「もっとがんばればよかった！」

土田「わたしがチケット4枚しか買わなかったから！」

木下「ライブの？」

土田、頷く

木下「4枚買ってたんですか」

土田「うう・・・ちよっと」

土田、一階のトイレに入る。

木下がひとりになる。

優季が玄関から入って来る。

優季「やほ」

木下「ああ」

優季「ね、ご飯たべいかない？」

木下「あーいいんだけど」

優季「なに？」

木下「ちよっと」

優季「つちさんいるの？」

【トイレの中】土田「本当にいいバンドがやっていけない世の中！くそ！つぶれる泥になれ！くそ」

木下「うん。解散したんでしょ、スカハイ」

優季「もーまじ昨日ちよー大変だったんだよ、泣いて泣いて」

木下「だろうね、家帰って来てからもずっと泣いてたもん」

優季「まじ？昨日優季も10時半くらいまで付き合ってたんだよ」

木下「そうなんだ」

優季「下北の駅前で。嫌なって帰ったけど」

優季「うたってるし」

木下「ライブいけばよかったかな」

優季「なんで？」

木下「どうだった？」

優季「んーふつう」

木下「もういけないんだなーと思って」

優季「別にいいでしょ」

【トイレの中】

土田【唄（空にチェンソー）／スカハイ】

相づちの間さえもないよ 早すぎてついていけない  
なんて言おうか迷ってるんだ 気がつけば次の話題

明日は何かになれるかな？ スピードの違う世界で

急に豪雨急に stop the rain

僕にも晴れを見せてくれよ

雷雲の間裂いてチェンソー

どうか wanna see the rainbow

土田がトイレからでてくる。

優季「つちさんーいつまでそんなことやってんの？」

土田「なに」

優季「みつともないよ」

土田「優季ちゃんには関係ないでしょ」

優季「仕事いったの？」

土田「うるさいな」

優季「え？」

土田「うるさいよ」

優季「はーい」

土田「優季ちゃんにはね、分からないよ」

優季「わかんないし」

土田「なによ、なによ」

優季「なに？昨日2時間もライブ付き合ってたのにー」

土田「付き合ってもら、もらって、ない」

優季「はい？」

土田「付き合ってたあげたとか言わないでよ！」

優季「だってそうじゃん」

土田「そういうんじゃないんだから！」

優季「なに？」

土田「ただのバンドじゃないんだから」

優季「は？」

土田「スカハイは、ただのバンドじゃないんだからね。」

優季「なにが？」

土田「戦ってたんだよ」

優季「なにと」

土田「世界と、世界と戦ってたんだよ」

優季 「なに世界って」  
土田 「世界と戦ってたんだよ」  
優季 「なにが？どうやって戦ってたの？」  
土田 「歌って、歌って」  
優季 「歌って？」  
土田 「正直に、正直に歌うっていうのは戦ってるってことなんだよ」  
優季 「は？ほんとに今世界と戦ってる人たちだっているのにさ」  
土田 「ちがうでしょう！」  
優季 「軍とか入った方がよっぽど戦えるでしょ」  
土田 「違うじゃん！優季ちゃんに聞いてたの！そういうの全部が世界！そういうの全部が世界でしょ！その世界全部と戦ってたの！スカハイは」  
優季 「意味わかんない」  
土田 「そういう世界全部と戦ってたんだよ。なんで分かんないの！」  
優季 「分かんないよ」  
土田 「昨日優季ちゃんは、スカハイのなにを見てたの！」  
優季 「何をって」  
土田 「何を見てたの！」  
優季 「見てたよ、全部、ふつうに」  
土田 「見てない！何にも見えてない！」

間

優季 「でももう終わりでしょ、それも」  
土田 「おわ」  
優季 「売れなくて、解散もしちゃってんじゃない、何にもならないじゃん」  
土田 「う、売れないのは世界のほうが悪いんだよ」  
優季 「は？」  
土田 「世界のほうが悪いんだよ」  
優季 「世界に良いとか悪いとかないでしょ」  
土田 「そうじゃなくて」  
優季 「ちょっと待って待って。別にいいんだけど。わたしはさ、土さんがそうやってなんかがんばった人みたいになってるのが嫌なの、土さんはなんもやってないじゃん」  
土田 「わたしは」  
優季 「スカハイは戦ってたかもしれないけど、つちさんは何もしてないじゃん」  
土田 「わたしは」  
優季 「それがダメとか言ってるんじゃない、あたかもなんかした人みたいにしてるのが嫌なの」  
土田 「わたしはずっと見て来て、応援してきて」

木下 「ギダちゃん？」  
柳田 「どうも」  
木下 「どこいったの？」  
柳田 「ちよっと」  
木下 「ちよっと？」  
柳田、二階へ上がっていく。

【二階／柳田の部屋】  
柳田が入ってくる。  
カゴの中身を確認し、カゴを手を持つ。  
安藤、襖を開ける。

安藤 「柳田さん？」  
柳田 「どうも」  
安藤 「どこいくの？っていうかどこいったの？」  
柳田 「ちよっと」  
安藤 「ちよっと？」  
柳田 「安藤さん、決めたんですよ。」  
安藤 「なにを」  
柳田 「やっぱり、この事実を伝えにいきます」  
安藤 「どこに」  
柳田 「政府ですよ」  
安藤 「政府？」  
柳田 「はい」  
柳田 「永田町そんなに遠くないから、終わったら戻ってきますよ。」  
安藤 「戻って来るって・・・」  
柳田、一階へ降りていく。

優季「だから、それは何にもしてないでしょ」

土田「……他にどうしたらいいか、他にどうしたらいいか分からないじゃないかよ！」

優季「だからできない人はなんにもしなくていいんだって」

柳田、一階へ降りて来る。立ち止まる。

土田「優季ちゃんになにが分かるのさ」

優季「は？」

土田「あんたが一番なんもしてないでしょ！」

優季「なにそれ」

土田「そんな偉そうなこと言って、わたしたちの家賃で生きてるんですよ」

優季「なにいつてんの」

土田「そうでしょ。全然働きもしないで、わたしたちが働いて家賃払ってそれがあんたんちに入ってるんだから」

木下「ちよつと土さん」

優季「……なんでそんなこというの」

土田「それで生活してるんだから」

優季「それと今の話とは関係ないでしょ！」

土田「そんなやつに私の苦しみはわからない！」

優季「あたしは」

土田「優季ちゃんにそんなこと言う資格ない！資格ないよ！」

優季「じゃあバイトするしわたし」

土田「なにじゃあって」

優季「バイトしてここ住んで家賃払って暮らすし、それくらいできるし」

土田「そういうことじゃない」

優季「みんなだって、別にただ毎日働いてるだけじゃん」

土田「……」

優季「そうでしょ。土さんだってスカハイのことしか考えてなかったじゃん。木下さんだって、こつち急に帰ってきて毎日何もしてないし。いいんだよそれで。だから楽しいんじゃない、ここ。だからわたしここに来るんだし。いいんだよ、別に、なんもできないんだから。なんかしなきゃいけないみたいなのやめてよ」

柳田「優季ちゃん、そんな寂しいこというなよ」

優季「……ってゆうか、なにしてんのギダちゃん」

柳田「あたしが言うて来るからさ」

優季「なにを？」

柳田「この現状をさ、伝えに行くことにしたんだよ」

優季「え？どこに？」

柳田「永田町。」

優季「ははは。」

柳田「へへ。これはやっぱり大問題だとおもうからさネズミになったのは、店長だけじゃないかもしれないし。わたしさ、使命感を感じるんだよね。」

優季「ふーん」

柳田「ついでにこのことも言うて来るよ。そしたらさ、ちよつと世界が良くなるかもわかんないよ」

優季「ありがとう。」

柳田「いいよ。いつてきまーす」

安藤「ちよっと」

優季「いつてらっしやい」

ドアがしまつて、柳田がいなくなる。

安藤「いいの、あれ」

優季「いいでしょ」

安藤「大丈夫なの。捕まるよ」

優季「捕まったら捕まったでしょ」

木下「つめたいな優季ちゃん」

優季「……そうだよ。でも木下さんも一緒でしょ」

一時沈黙

木下、タバコを吸う。

安藤「一本、もらっていい？」

木下「吸いますっけ？」

安藤「やめてただけど……」

木下、一本差し出す。火をつけてあげる。

安藤「ありがとう」

安藤、2、3回吸ってから火を消す。

安藤「優季ちゃん、さっきのだけど」

優季「？」

安藤「そんな簡単じゃないよ。その、こうやって、やってくつていうのは。」

安藤「なんにも考えてないわけじゃないし……なんにも考えてないわけじゃないよ。」

優季「うん」

安藤「うん。そんな楽じゃないし。なんか……ずっとこのままってわけじゃないと思ってるし。」

優季「このままじゃない」

安藤「わたしだって……ねえ、その。」

木下「安藤さん、仕送りしてるんだよ」

優季「……しおくり？」

木下「家族に、弟さん入院してるから」

安藤「別に、よくあることだから。だから、どうかじゃないし」

優季「……」

安藤「木下さんだってそうでしょ」

木下「わたしは」

安藤「看病しに、帰ったんだから」

優季「……え？そうなの？」

安藤「両親の」

優季「そんなん聞いてないし」

安藤「別にこんなこと言いたいわけじゃないけど、わたしは、幸せになりたいと思ってるよ。人並みに。そうでしょ。だから、がんばろうよ、なにもできてないわけじゃないでしょ。木下さんだって、嫌になったりもするけど、ちゃんと帰れるなら帰った方がよいよ。つちさんは？今日仕事ないの？」

土田「わたし……今日は……」

安藤「わたし、いくわ。仕事。店長になるから。もうすぐ。」

安藤「ちゃんとしてれば、大丈夫だと思うよわたしは。」

安藤、玄関からでていく。

木下がタバコを消して、二階へあがっていこうとする。

優季「木下さん、そうだったの？」

木下「……死んだよ」

優季「え？」

木下「死んだの」

優季「え、だれが」

木下「親」

優季「親って」

木下「ふたりとも。一日違いで」

優季「え、なんで、いつ」

木下「ここにきた前の日。」

木下「だから別に、優季ちゃんの言うとおりに、なんもしてないよ」

優季「前の日って、お葬式とかは」

木下「したと思うよ」

優季「思う？」

木下「親戚とかが。たぶん。」

優季「たぶん？」

優季「なにそれ、なんで、ほんとに？ふたりともって、ふたりとも一気に死ぬ事あるの？なんで」

木下「あるよ、ビョーキで」

優季「ビョーキ？」

木下「ビョーキ」

優季「そんな」

木下「ふつうじゃない？」

優季「ふつう？」

木下「そういわれたから。悲しいけど、普通のことだからって」

優季「誰に？」

木下「知らない、いた、女の人」

木下「わたしはつちさん、健全だと思うよ。なくなることは、悲しまないといけないと思うよ」

優季「なんで、こんなところ戻って来ちゃったの？」

木下「なんで？」

優季「なんで」

木下「最低だよ」

土田「悲しくないの？」

木下「かなし……悲しい？わかんない。わかんないよ。」

木下「……なんかおかしくない？」

優季「なにが？」

木下、首を横にふる

木下「わたしは、こわくなったよ。わたしも普通に死ぬね。」

優季「死ぬって？」

木下「死ぬよたぶん。きっと同じだから」

優季「どういうこと？」

木下「死ぬのにどうやってがんばって生きていくの？」

土田『♪(歌) 笑い切らずとも迎えはやってくる』

優季「なにいつてんのつちさん」

土田「これね、みんな死ぬっていう、平等に、ってことだと思うの。」

土田「スカハイが、そう歌ってたんだよ」

木下「ははは。……スカハイいいこと言うね。」

↓優季の携帯が鳴る。

優季はそれを止める。

【二階和室】

優季と木下が居間にいる。

木下「優季ちゃん、ごはんたべいかない？」

優季「いいよ」

木下「おなかすいた」

優季「なにたべたい？」

木下「栄養」

優季「なにそれ」

木下「はは」

優季「あ、そういえば、缶切りもって来たんだよ。昨日。忘れてたけど」

木下「ああ」

優季「桃缶たべようよ」

木下「えー」

優季「化石桃缶<sup>w</sup>」

優季、桃缶取りに行く

優季「大丈夫かな」

木下「やなんだけど」

優季「あけて」

木下「あたし？」

木下、あけはじめる

優季「ギダちゃんかえってこないねー」

木下「うん」

優季「ほんとにいったのかな。永田町？つてなに？国会？」

木下「かな」

優季「ほんとに捕まったらどうしょ」

木下「なんで」

優季「不審人物でしょ」

木下「はは」

優季「あ、お皿」

優季、キッチンにお皿を取りに行く。

木下「本当だったんじゃないかなー」

優季「なにが？」

木下「ネズミ」

優季「まさか」

木下「本当だったんだよ。」

優季「ふふ。わたしは嘘だったと思うよ。」

優季「(お皿を置いて) はい、開いた？」  
木下「うん」

木下が、缶の蓋をあける。

優季「わー！あ、でも(桃が)大丈夫だ」  
木下「ほんとだ」

優季が取り分ける

優季「はい」

木下「うん」

優季が木下を見ている。

木下「毒味させんなよ」

優季「ねえ、あたし一緒にいこうか？」

木下「え？」

優季「実家。福島だっけ？そんな遠くないし」

木下「なんで」

優季「……暇だから。ひとりで帰るのあれなら、わたし一緒に近くまで行って、なんか近くで待っててもいいし。」

木下「なんで優季ちゃんが。」

優季「いいよ？」

木下「関係ないじゃん」

優季「……(笑う)」

木下、桃を食べる。

優季「いける？」

木下「うん。いけるよ普通に」

優季「うそ、すごいね缶詰って。(桃を食べる)ん、おいしいね。ちょっと待って、呼んでくる。」

優季、二階へあがっていく。

木下「うん。おいしい」